

## 自民俗誌の可能性 —農漁民の覚醒—

加藤 幸治（武蔵野美術大学）

戦前に渋沢敬三が主宰し、民族学博物館としての活動と常民文化の研究活動を展開したアチック・ミュージアム（以下、アチック）は、研究の三本柱として民具蒐集、漁業史研究、文献索隠と名付けた風俗史研究を掲げ、「職業に専攻に性格に相異つた人々」が世代を超えて平等に目的を共有する「チームワークのハーモニアスデヴェロップメント」を目指した。

この有名な一節は、アチックに集った人々の多様性を示している。渋沢敬三と同年代の研究者や職業人から、大学を卒業して間もない新進気鋭の学士、敬三が見込んだ若者、在野の蒐集家から書生に至るまで、そして爵位を持つ渋沢敬三から農民出身者まで。その「相異つた人々」が平等に参加できたのは、伝記としては渋沢敬三の人格的評価として描かれるが、むしろそれぞれに異なるミッションを託すという優れた研究所のオーガナイズングの面から評価すべきであろう。

アチックの彙報（調査報告書）には、農民漁民の若者が自身の生活を記録した特異な仕事がある。大西伍一の薫陶を受けた吉田三郎の『男鹿寒風山麓農民手記』（一九三五年刊）と『同 農民日録』（一九三八年）、安芸三津の青年、進藤松司が書いた『安芸三津漁民手記』（一九三七年）、知里真志保の指導のもと佐藤三次郎が漁村の暮らしを記録した『北海道幌別漁村生活誌』（一九三八年）、越後三面の丹田二郎が山村生活を記録した『越後三面村布部郷土誌』（一九三八年）、喜界島の拵嘉一郎が食生活を記録した『喜界島農家食事日誌喜界島調査報告1』（一九三八年）である。

これらは、農民漁民がみずからの生活を内省し「書く」という意味では、民俗学的な実践としての「自民俗誌」とみることができる。しかし同時代に目を向ければ、農村を近代教育では実現できない青年育成の場とみなす、多様な農村青年教育の実践との関連をみることができる。農村というフィールドは、都市生活や工場労働等による人間疎外、近代社会における個人の確立をめぐる葛藤からの「人間性復権」に向かう、実践の最前線であった。農民詩や農民文学、そして平凡な生活の記録によって農民や共同体のあるべき姿を模索した若者たち、あるいは無政府主義などラディカルな政治思想よりも「土に生きる」といった個による実践を目的に農村での労働に對峙した若者たちのなかには、民俗学との接点を持つ者も少なくなかった。

アチックには、農村教育研究会の中心人物であった大西伍一や小野武夫、小出満二、小田内通敏らが深く関与している。彼らは「郷土調査」と「郷土読本」の作成を重視した。有賀喜左衛門の奨めで彙報として刊行された竹内利実『小学生の調べたる上伊那川島村郷土史』（1934年）や、宮本常一が大阪時代に作成した『とろし 大阪府泉北郡取石村生活誌』（1937年）などの、新しい小学校教育の理論的基盤は農村教育研究会の理論書にあった。また、早川孝太郎が花祭のフィールドで接した民具蒐集による労作教育は、アチックの民具研究の直接のきっかけとなった。

アチックから刊行された農村青年による生活の記録は、常民文化研究の資料として活用しうるものではあったが、作成に取り組んだ地方農村青年たちからみれば、その記録の実践そのものが目的たりうるものであった。農漁民としての自覚に目醒めた青年たちは、民俗誌や生活の記録を書くことを自らに課し、アチックの同人もこれを評価した。ここに戦前の民俗学、そして常民文化研究の顧みられてこなかった側面、そしてアチックが活動した時代の特質が浮き彫りとなる。